

『萬葉集』柿本人麻呂「日並皇子挽歌」における漢籍の受容

—「春花之」と「望月乃」の文字表現を中心に—

内田 夫 美

一 はじめに

柿本人麻呂歌には枕詞が多々用いられ、その多様性、獨創性等、それらの枕詞は人麻呂の作品を考える上で避けては通れない重要なものである。本稿は、その中でも『萬葉集』巻二、挽歌の部に収載される「日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首」(以下、「日並皇子挽歌」とする)にある人麻呂歌初出の譬喩的枕詞「春花之」と「望月乃」の文字表現を中心にその典拠の可能性について考察する。日並皇子尊とは、天武天皇と持統天皇との長子である草壁皇子のことで、その殯宮の時の作と題詞にある歌は次の通りである。¹⁾

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌
 天地之 初時 久堅之 天河原乃 八百萬 千萬神之 神集
 集座而 神分 分之時尔 天照 日女之命 一云 指上 日女
 之命 天乎婆 所知食登 葦原乃 水穗之國乎 天地之 依相之
 極 所知行 神之命等 天雲之 八重搔別而 一云、天雲之 八
 重雲別而 神下 座奉之 高照 日之皇子波 飛鳥之 淨之宮尔
 神隨 太布座而 天皇之 敷座國等 天原 石門乎開 神上

上座奴 一云、神登、座尔之可婆、吾王、皇子之命乃、天下、所知、
 知食世者、春花之、貴在等、望月乃、満波之計武跡、天下、一
 云、食國、四方之人乃、大船之、思憑而、天水、仰而待尔、何方
 尔、御念食可、由縁母無、真弓乃爾、宮柱、太布座、御在香乎
 高知座而、明言尔、御言不御問、日月之、數多成塗、其故、皇
 子之宮人、行方不知毛、一云、刺竹之、皇子宮人、歸邊不知尔為

(巻二一六七)

反歌二首
 久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門之 荒卷惜毛
 茜刺 日者雖照有 烏玉之 夜渡月之 隱良久惜毛

(巻二一六八)

この長歌は二段構成であり、後半部は「吾王、皇子之命乃」からである。前半に詠まれる「神下、座奉之、高照、日之皇子」とは、「飛鳥之、淨之宮尔、神隨、太布座而」とあり、飛鳥淨御原宮にて統治をされた天武天皇と捉えられる。前半に天武天皇の叙述があるのは、後半に描かれる「吾王、皇子之命」と呼称される日並皇子を天武天皇

の正当な後継者として位置づける為である⁽²⁾。後半の冒頭は、その皇子の統治が「天下所知食世者」と仮定の形で「春花之貴在等望月乃満波之計武跡」と詠まれている。この「春花之」と「望月乃」とは人麻呂歌初出の譬喩的枕詞である⁽³⁾。

土橋寛氏は、枕詞は本来、美称の讃め詞として神名・地名という固有名詞の上に冠して用いられたもので、それが歌謡を場とすることによって普通名詞に冠せられる美的称辞に改造され、やがて用言に冠する枕詞が現れ、それらはその使用される場、素材、固定性において、明らかに固有名詞や普通名詞に冠する枕詞とは異なり、むしろ序詞に近い、と述べられる⁽⁴⁾。これは枕詞を時系列的に見たものでもあり、人麻呂はこの最後のところに位置する歌人で⁽⁵⁾、今回検証する枕詞も用言にかかる。澤瀉久孝氏は、人麻呂の枕詞について、その半数が人麻呂の創造であり、記紀歌謡にある伝統的枕詞においても人麻呂による独自の解釈が加わり、人麻呂の枕詞は意味を持って存在すると述べられる⁽⁶⁾。

「春花之」と「望月乃」とによって導かれる「貴在」と「満波之計武」とは、日並皇子の理想的な統治の姿を表現しているであろう。小島憲之氏は、この人麻呂の「春花之」が外来的なものかどうか決定し難いとしつつ、「枕詞はそれ自身とそれに続く語句との連結によってその効力を發揮する。筆をあやつる時代ともなれば、そのつなぎの仕方にも、外来的なものを移植し、「万葉語」は複雑化してゆく。」と人麻呂の時代における枕詞の漢籍による影響を示唆される⁽⁷⁾。また、身崎壽氏は「春花之」と「望月乃」について、人麻呂におけるこのよう

な枕詞の発見が何によって可能となったのか追究することこそ課題だったのかもしれないとされ⁽⁸⁾、この表現は出典の存在を窺わせる。

人麻呂の枕詞の文字表現を見ると、漢籍よりの受容と捉えられるものが何例かある。例えば、「樛木乃 弥継嗣尔」(卷一一二九)の「樛木」の文字表現は、『毛詩』(国風、周南、樛木三章章四句)の「南有⁽⁹⁾ 樛木 葛藟繫之」よりの引用で、「三五月之 益目頰染」(卷二一九六)の「三五月」も詩語の文字をそのまま借用した典拠のある語であり、「黄葉乃 過伊去等」(卷二二〇七)の「黄葉」も六朝から初唐まで一般に通行する中国の例が『萬葉集』にも採用されている⁽¹⁰⁾。

一方、特別なものでなくとも漢籍よりの引用と想定される文字表現もある。例えば、「春草之」である。小島憲之氏は、「春草」という中国文学的情感をもつ語をそのまま「春草」という歌語として成立させたものとされつつ、但し枕詞としての「春草の」を除くとされる⁽¹⁾。だが、漢籍の「春草」には悲哀の意のあるものとなないものがあり、あるものは楚辞にある「招隱士」を典拠とするが、ないものは本来の春草の持つ清新の氣に満ちた姿を詠んだもので⁽¹²⁾、『萬葉集』の枕詞として用いられる「春草之」の中にもそれはあると言え、漢籍よりの引用に枕詞を除く必要はなからう。また、高市皇子挽歌の「朝霜之 消者消言尔」(卷二一九九、異伝歌)の「朝霜」も⁽¹³⁾、

送⁽¹⁴⁾應氏⁽¹⁵⁾詩二首(第二詩)

魏、曹植

○清時難⁽¹⁶⁾屢得⁽¹⁷⁾ 嘉會不可⁽¹⁸⁾常 天地無⁽¹⁹⁾終極⁽²⁰⁾ 人命若⁽²¹⁾朝霜⁽²²⁾：

〔文選〕卷第二十

樂府十七首、短歌行

晉、陸機

○置「酒高堂」 悲歌臨_レ觴 人壽幾何 逝如「朝霜」…

(「文選」卷第二十八)

と漢籍にあり、これらの漢籍の用例は人命を朝霜の消えやすさに譬えている。人麻呂の「朝霜之消」も人の命の消えやすさを詠むのであり、その典拠はこれらの漢籍に求められる。高市皇子挽歌の「露霜之消者消久」(卷二一九九、本文歌)の「露霜」が命とかかわる例は仏典にあるという。

枕詞である「春花之」や「望月乃」という二例の出典や発想にも、漢籍等の影響を受ける可能性が考慮される。以下、その可能性と表現意図について、人麻呂の枕詞の創造方法を踏まえつつ、考察していく。

二 「春花之」―「春草」との比較を通して―

まず、本章では「春花之」について検証する。その際に「春花」と類似する点の見られる「春草」も検証対象として両者の性質を明らかにしつつ進める。なお「春草」については『和漢語文研究』第十九号(二〇二一年十一月刊)にて漢籍の例を中心に検証を行っており、ここではその成果に基づいて考察する。

『萬葉集』における「春草」の用例は、

過「近江荒都」時柿本朝臣人麻呂作歌

：春草之 茂生有 霞立 春日之霧流 或云、霞立 春日香霧流 夏草香 繁成奴留 百磯城之 大宮處 見者悲毛 或云、見者 左夫思母

長皇子遊「獨路池」之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

(卷一―二九)

：久堅乃 天見如久 真十鏡 仰而雖見 春草之 益目類四寸 吾於富吉美可聞 (卷三―二三九)

市原王宴禱「父安貴王」歌一首 春草者 後波落易 巖成 常磐尔座 貴吾君

(卷六―九八八)

泉河邊作歌一首 春草 馬昨山自 越來奈流 鴈使者 宿過奈利

(卷九―一七〇八)

寄「春草」(第二歌)

春草之 繁吾戀 大海 方往浪之 千重積

(卷十一―九二〇)

と五例ある。また、『萬葉集』に「はるはなの」は、

悲「寧樂故郷」作歌一首并短歌

：春花乃 遷日易 村鳥乃 日立往者 刺竹之 大宮人能 踏平之 通之道者 馬裳不行 人裳往莫者 荒尔異類香聞

(卷六―一〇四七)

懂「逢

住吉之 里行之鹿齒 春花乃 益希見 君相香聞

(卷十一―八八六)

忽沈「枉疾」殆臨「泉路」仍作「歌詞」以申「悲緒」一首并短歌

(第一「反歌」)

世間波 加受奈积物能可 春花乃 知里能麻我比尔 思奴倍吉於 母倍婆 (卷十七―三九六三)

『萬葉集』柿本人麻呂「日並皇子挽歌」における漢籍の受容 ―「春花之」と「望月乃」の文字表現を中心に―

更贈歌一首并短歌

春花乃 佐家流左加里尔 於毛敷度知 多乎里可射佐受 波流乃野能 之氣美登妣久々 鶯 音太尔伎加受 乎登賣良我 春菜都麻須等

(卷十七—三九六九)

述戀緒一歌一首并短歌

春花乃 宇都呂布麻泥尔 相見祢婆 伊多母須敝奈美 之伎多倍能 蘇泥可敝之都追 宿夜於知受 伊米尔波見礼登 宇都追尔之 多太尔安良祢婆

(卷十七—三九七八)

述戀緒一歌一首(第四反歌)

春花能 宇都路布麻泥尔 相見祢婆 月日餘美都追 伊母麻都良牟曾

(卷十七—三九八二)

二上山賦一首

波流波奈乃 佐家流左加里尔 安吉能葉乃 尔保敝流等伎尔 出立氏 布里佐氣見礼婆 可牟加良夜 曾許婆多敷刀伎 夜麻可良夜 見我保之加良武

(卷十七—三九八五)

教諭史生尾張少昨一歌一首并短歌

春花能 佐可里裳安良牟等 末多之家牟 等吉能沙加利曾 波奈礼居豆 奈介可須移母我 何時可毛 都可比能許牟等 末多須良无 心左夫之苦

(卷十八—四一〇六)

六日遊覽布勢水海一作歌一首并短歌

春花之 繁盛尔 秋葉乃 黄色時尔 安里我欲比 見都追思 努波米 此布勢能海乎

(卷十九—四一八七)

追同處女墓一歌一首并短歌

春花乃 尔太要盛而 秋葉之 尔保比尔照有 惜 身之壯尚 大夫之 語勞美 父母尔 啓別而

(卷十九—四二二一)

等、「日並皇子挽歌」以外に十の用例あり、その内、八例は大伴家持によるものである。

これらを見ると、「春草(之)」と「春花(乃)」とはその用法が、

長皇子遊 獨路池 之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

春草之 益目頰四寸 吾於富吉美可聞 (卷三—二二九九)

謹レ逢

春花乃 益希見 君相香聞 (卷十一—一八八六)

市原王宴禱一父安貴王一歌一首

春草者 後波落易 巖成 常磐尔座 (卷六—九九八)

悲 寧樂故郷一作歌一首并短歌

春花乃 遷日易 村鳥乃 且立往者 (卷六—一〇四七)

等、似ている。言葉の類似だけではなく、二三九番歌の「春草」や一八八六番歌の「春花」は、共に譬喩的枕詞で悲哀の意がなく、「うつろふ」(移り変わっていく)にかかる九八八番歌の「春草」や一〇四七番歌の「春花」は悲哀の意を持つなど、悲哀の有無等も共通する。

漢籍の「春草」には、先述したように、

招隱士一首

漢、劉安

王孫遊兮不歸 春草生兮萋萋 歲暮兮不自聊 蟪蛄鳴兮啾啾

(中略) 王孫兮歸來 山中兮不可久留

〔文選〕卷第三十三

獨不見

梁、柳惲

と詠む「招隱士」を典拠とし¹⁸⁾、

登池上樓二首

南朝宋、謝靈運

○別鳥望風臺 天淵臨水殿 芳草生未積 春花落如霰 出從張
公子 還過趙飛燕 奉帚長信宮 誰知獨不見
〔玉臺新詠〕卷第五

○…池塘生春草 園柳變鳴禽

〔文選〕卷第二十二

索居易永久 離羣難處心

〔玉臺新詠〕卷第一

古詩八首(第八首)

○穆穆清風至 吹我羅裳裾 青袍似春草 長條隨風舒 朝登

津梁上 褰裳望所思 安得抱柱信 皎日以爲期

別賦

梁、江淹

○春草碧色、春水淥波。送君南浦、傷如之何。至乃秋露如珠、

秋月如珪。明月白露、光陰往來。與子之別、思心徘徊。：

〔文選〕卷第十六

等、「悲哀」の意のある「春草」がある。

一方、「招隱士」を典拠としない「春草」は、

擬古三首(第一首)

南朝宋、鮑照

○…獸肥春草短 飛鞚越平陸 朝遊鴈門上 暮還樓煩宿

石梁有餘勁 驚雀無全目 〔文選〕卷第三十一

三日

南朝宋、鮑照

○…提觴野中飲 愛愛煙未開 露色染春草 泉源潔冰苔

泥泥濡露條 嫋嫋承風栽 〔鮑氏集〕卷第八

等、春の景物を述べその美しさを表すもので、「悲哀」の意はない。

漢籍における「春花」も、

と、第一詩は「夫を思うのに会うことができない」と、夫と離れて独
りいる妻の悲しみを「春花落つ」すなわち「散る」と表現し、「春花」
は景でありつつ妻の悲哀を象徴する。第二詩は「憶別春花飛 已見秋
葉稀」(別れた時には春花が飛び、今はすでに秋の葉をまばらに見る)
と、「春花」と「秋葉」とを対照させて時の推移を表現し、その間の
別れて会えない悲しみを詠み、共に「春花」に「悲哀」の意がある²¹⁾。
同様に、

○梁元帝：(中略)：又代舊姬有怨詩曰、寧為萬里隔 乍作

死生離 那堪眼前見 故愛逐新移 未展春花落 遽被涼風

吹 怨黛舒還斂 啼紅拭復垂 誰能巧為賦 黃金妾不貲

○梁元帝蕩婦秋思賦曰、蕩子之別十年、倡婦之居自憐。：(中略)

：秋風起兮秋葉飛、春花落兮春日暉。春日遲遲猶可至、客子行

行終不歸。 〔藝文類聚〕卷第三十二、人部十六、閨情

等は、秋風(涼風)と対照させて「春花落」と詠み、時の推移を表し

て、その間の捨てられた苦しみや客子(旅人の意。夫であろう)の戻

らぬ悲しみを詠む。また、

梁元帝關山月曰、朝望清波道 夜上白登臺 月中含桂樹 一流影自徘徊 寒沙逐風起 春花犯雪開 夜長無與晤 衣單誰為裁

も別離の悲しみを詠む中に「春花」があり、春の景色を詠む、

梁元帝春日詩曰、春還春節美 春日春風過：(中略)：春結記能申 欲道春園趣 復憶春時人 春人竟何在 空爽上春期 獨念春花落 還似昔春時 (『藝文類聚』卷第三、歲時上、春)

の「春花落」も、「春花」の散るのを見て昔の春を思い、感傷的になるという表現である。これらの「春花」にも悲哀がある。

しかし、「春花」にも、

○魏陳王曹植詩曰、有美一人 被服織羅 妖姿豔麗 蕪若春花 紅顏讎睡 雲髻峨峨 彈琴撫節 為我弦歌 清濁齊均 既亮且和 取樂今日 遑恤其他 (『藝文類聚』卷第十八、人部二、美婦人)

贈長沙公(第二詩)

東晉、陶淵明

○於穆令族 允構斯堂 諧氣冬暄 映懷圭璋 爰采春花 載警秋霜 我曰欽哉 實宗之光 (『陶淵明集』卷之二)

中興歌十首(第七詩)

南朝宋、鮑照

○九月秋水清 三月春花滋 千金逐良日 皆競中興時 (『鮑氏集』卷第七)

南苑還看人

梁、庾肩吾

○春花競玉顏 俱折復俱攀 細腰宜窄衣 長釵巧挾鬢 洛橋

初度燭 青門欲上關 中人應有望 上客莫前還 (『玉臺新詠』卷第八)

等、悲哀の意のないものもある。それらは自然に咲く「春花」の美しさに基づき発生した表現であろう。

このように、漢籍における「春草」と「春花」にも、日本の用例と同じく、悲哀の意の有るものやないものがある。また、例えば、「春草碧色、春水淥波。：至乃秋露如珠、秋月如珪」(梁、江淹「別賦」、『文選』卷第十六)、「秋風起兮秋葉飛、春花落兮春日暉」(梁、元帝「蕩婦秋思賦」、『藝文類聚』卷第三十二)のように、時の経過を表すのに「春」や「秋」の季節の風物を繰り返して、その中に「春草」や「春花」を詠み込む等、漢籍における「春草」と「春花」との表現方法は似ている。「春草」のすべてが漢籍よりの受容と想定されるならば、「春花」も同様にすべて漢籍より受容された表現と捉えることができよう。但し、「春草」には「招隱士」という古い典拠があるのに対して「春花」にはそのような古い典拠はなく、魏の曹植のものが最初である。次に位置するのは東晉の陶淵明の「春花」で、それに続くのが南朝宋の鮑照の「春花」であり、これらの詩に悲哀の意はない。梁代に入って、先述したような「春花落」という表現などが現れ、初めて悲哀の意が伴うようになる。

本来、枕詞とは讚辞である。「日並皇子挽歌」と同じく人麻呂が詠む長皇子を寿ぐ「春草之益目類四寸」(卷三・二三九)の枕詞「春草之」にも悲哀の意はない。殊に、日並皇子の統治は仮であっても賞讃されるべきものである。「日並皇子挽歌」の「春花」が漢籍の影響

を受けるとすれば、それは悲哀の意のない「春花」にあるのではないか。悲哀の意のない魏の曹植詩の「春花」は美人の美しい姿を譬える。⁽²³⁾東晉の陶淵明詩の「春花」は「贈長沙公」と題する第二詩にあり、⁽²⁴⁾「爰采春花」載警秋霜」と「秋霜」と対照して詠まれる。この「春花」は、長沙公の若く才華(才能)に富むことの譬えであり、⁽²⁵⁾若き人物の才華を賞讃して譬える点が注視される。

南朝宋の鮑照詩の「春花」は、「中興歌」という天子を讚美する十首の中にある。「中興歌」は次の通りである。⁽²⁶⁾

中興歌十首

南朝宋、鮑照

- 1 千冬逢一春 萬夜見朝日 生平值中興 歡起百憂畢
- 2 中興太平運 化清四海樂 祥景照玉臺 紫煙遊鳳閣
- 3 碧樓含夜月 紫殿爭朝光 綵輝散蘭麝 風起自生芳
- 4 白日照前窗 玲瓏綺羅中 美人掩輕扇 含思歌春風
- 5 三五容色滿 四五妙華歇 已輸春日歡 分隨秋光設
- 6 北出湖邊戲 前還苑中遊 飛轂繞長松 馳管逐波流
- 7 九月秋水清 三月春花滋 千金逐良日 皆競中興時
- 8 窮泰已有分 壽夭復屬天 既見中興樂 莫持憂自煎
- 9 襄陽是小地 壽陽非帝城 今日中興樂 遙治在上京
- 10 梅花一時豔 竹葉千年色 願君松柏心 採照無窮極

〔鮑氏集〕卷第七(數字は稿者による)

「中興歌」の意図は新たに即位した天子の威徳を讃えてその繁栄を祈ることである。その第七詩に「春花」は「秋水」と対照して用いられ、「九月は秋水が清く、三月は春花が盛んに咲く」と、秋と春の穏

やかな景色が詠まれている。そのような穏やかな景色があるのは天子の統治が良いからであり、そこに既に賞讃の意がある。その上、「秋水」は『莊子』にある言葉で、その水が清いというのは、古来黄河が澄む時に聖天子が現れるという故事を想起させる。⁽²⁷⁾「秋水清」は聖天子の意を包含させて天子を賞讃すると言えよう。「春花」も景を詠みつつ、陶淵明詩に倣って、⁽²⁸⁾天子の若き才華を譬える意の包含が想定される。中森健二氏はこの天子を南朝宋の孝武帝とされ、孝武帝が即位した後

に詠まれた「侍宴覆舟山二首」と同じ頃に「中興歌」も詠まれたのであろうと推測される。⁽²⁹⁾南朝宋の孝武帝は二十三歳の年に即位した若き皇帝であり、⁽³⁰⁾「春花」が若き才華の譬えならば、その対象としてふさわしい。

その天子を讃えた譬喩を引用し、日並皇子の賞讃に置き換え、日並皇子賞讃の意を包含させたのが、「日並皇子挽歌」の「春花之」ではないか。「春花之」が導く「貴」について、小島憲之氏は日並皇子の人格についての評価をも兼ね合わせつつ、「タフトシは語源的に言えば「タ太シ」であろう。盛んで豊かなるわしさがこれにあたる。」と春の花が盛んに咲きほこる状態とされた。⁽³¹⁾これは鮑照が若き天子を賞讃して「春花滋」と詠む方法に合致する。また、『説文解字』に「貴、物不賤也(六篇下、貝部)とあり、「貴」が日並皇子の高貴さを合

わせ持つ表現であることも間違いないだろう。このように、「日並皇子挽歌」の「春花之」は鮑照「中興歌」の天子賞讃の意を受容し、天子を日並皇子に置き換え日並皇子賞讃の意を包含する譬喩的枕詞として創造されたものと想定される。⁽³³⁾

三 「望月乃」―「三五」の文字表現と比較して―

次に、「望月乃」について考察する。

「日並皇子挽歌」の場合、「春花之」と対照して用いられる表現が「望月乃」であり、この「望月」は満月を表す。「中興歌」にも、

5 三五容色満 四五妙華歌 已輪春日歡 分隨秋光設

：（中略）：

7 九月秋水清 三月春花滋 千金逐良日 皆競中興時

と「春花」を詠む第七詩の前の第五詩に「三五」と満月が詠まれ、その「三五」の完全な姿が「満」という表現によって示される。第五詩全体を考えると、これは、

古詩十九首（第十七首）

孟冬寒氣至 北風何慘慄 愁多知夜長 仰觀衆星列 三五

明月満 四五詹兔缺 客從遠方來 遺我一書札

（『文選』卷第二十九）

とある『文選』にも収載される古詩に倣った、時の推移表現と捉えられる。しかし、古詩では「明月」であるのに鮑照詩が「容色」と表現するところに、満月の完全さに天子の完全な姿・形を包含させて天子賞讃が意図されているのではないか。「日並皇子挽歌」の「望月乃」が導く「満波之計武」の冒頭にある文字表現も「満」であり、「中興歌」第五詩の文字表現と一致する。「日並皇子挽歌」は「春花」と同様に第五詩の表現をも取り入れ「春花之」と対照させて「望月乃」とし、そこにも天子を日並皇子に置き換え日並皇子賞讃の意を含有させ

たのではないか。

だが、「日並皇子挽歌」の文字表現は「望月」であり、「中興歌」の文字表現は「三五」である。「中興歌」より引用したのであれば、なぜ「日並皇子挽歌」において「三五」ではなく、「望月」の文字表現を用いたのか、その意味を考えたい。

『萬葉集』における「日並皇子挽歌」を除く「もちづき（の）」は、

明日香皇女木庭殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

：三五月の 益目類染 所念之 君与時々 幸而 遊賜之 御

食向 木庭之宮乎 常宮跡 定賜 味澤相 目辞毛絶奴

（巻二―一九六）

詠 勝鹿真間娘子 歌一首并短歌

：望月之 満有面輪二 如花 咲而立有者 夏蟲乃 入火之如

水門入尔 船己具如久 歸香具礼 人乃言時 幾時毛 不生物呼

（巻九―一八〇七）

：十五月之 多田波思家武登 吾思 皇子命者 春避者 殖槻

於之 遠人 待之下道湯 登之而 國見所遊 九月之 四具礼

乃秋者： （巻十三―三三三四）

と三例あり、その文字表現も三種類ある。第一例の作者は人麻呂である。「三五」の文字表現が用いられ、人麻呂が満月の意を表す漢籍の「三五」の文字表現を知るの間違いない。第二例は女性の完璧な美しさを満月に譬えた例、第三例は擬似人麻呂歌と言われる題詞のない作者未詳の皇子挽歌である。「日並皇子挽歌」の「タタハシ」の訓みはこの歌を根拠とする。

しかし、漢籍における「望月」は、例えば、

宋孝武宣貴妃誄一首

南朝宋、謝莊

惟大明六年夏四月壬子、宣貴妃薨。…(中略)…高唐溼雨、巫

山鬱雲。誕發蘭儀、光啟玉度。望月方娥、瞻星比婺。

毓德素里、栖景宸軒。…(『文選』卷第五十七)

とあるように、一般的に「月を望む」(月を眺める)意である。次の、

梁簡文帝望月詩曰、流輝入畫堂。初照上梅梁。形同七子

鏡。影類九秋霜。桂花那不落。團扇與誰裝。空聞北臆彈

未舉西園觴。 (『藝文類聚』卷第一、天部上、月)

の詩も、「七子鏡」とあり鏡は丸いものであるより詠まれる月は満月

と分かるが、やはり詩題にある「望月」は「月を望む」(月を眺める)

意である。漢籍では、先述の『文選』の古詩や「中興歌」のように、

甄月城西門解中一首

南朝宋、鮑照

○始見西南樓。纖纖如玉鈞。末映東北墀。娟娟似蛾眉。

蛾眉蔽珠櫳。玉鈞隔瑣窗。三五二八時。千里與君同。夜移

衡漢落。徘徊帷戶中。…(『文選』卷第三十)

悼亡

梁、沈約

○去秋五月。今秋還照房。今春蘭蕙草。來春復吐芳。悲哉人

道異。一謝永銷亡。屏筵空有設。帷席更施張。遊塵掩虛座。

孤帳覆空牀。…(『玉臺新詠』卷第五)

等、満月を「三五(月)」と記するのが一般的である。

日本における「望月」の文字表現は現存の中ではこの人麻呂歌が初

出である。しかし、「望月」も中国、後漢、劉熙の『釋名』に³⁴⁾、

月缺也。滿則缺也。…(中略)…望、月滿之名也。月大十六日、
小十五日。日在東、月在西、遙相望也。 (釋天)

とあり、『藝文類聚』にも、

釋名曰、月闕也。滿則缺也。…(中略)…望、月滿之名也。日月
遙相望者也。 (卷第一、天部上、月)

と、この『釋名』の部分が引用される。「望月」を満月とする意も漢
籍によるもので、人麻呂もその文字表現を漢籍より持ち込んでいよう。
では、その文字表現をどこから持ち込んだか。その可能性の一つと
して仏典を挙げたい。仏典には満月を「望月」と記す例がある。それ
は次のようである。³⁵⁾

經云、一中解無量、無量中解一、了彼互生起、當成無
所畏。此之燈喻亦可喻於相即。直就光看、不見別相。唯
一光故。疏、隱顯俱成似秋空之片月者。第六秘密隱顯俱成門。
如八九夜月半隱半顯。正顯即隱、正隱即顯。不同晦月隱時
無顯。不同望月顯時無隱。

(唐、澄觀『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』卷第二)

これには、仏典の疏(注釈)の部分に隠れて見ることのできない「晦
月」と対照させて隠れずに常に現れる月として「望月」がある。この
疏は、經典の一と無量との関係を説明する。一が隠であり、無量が顕
で、それが互いに生起して半々、すなわち秋の空にある半月のような
状態であることが良いとし、「晦月」のような全くの隠であっても、「望
月」のような全く顕の状態であってもよろしくないと説く。これより
「晦月」とは新月、「望月」とは満月のことと理解される。この仏典注

疏は人麻呂の時代より少し後に書かれたものなので、これ自体を人麻呂が見たとは考えられない。しかし、満月を「望月」と記すところが注視される。推測となるが、仏典において「望月」を満月の意で用いる方法はもう少し時代を遡ってもあったのではないか。その方法を入麻呂歌は借用したのではないか。仏典では、

○此方人民作^二初生^一想、漸漸增長乃至^三月滿^一便作^二滿想^一。然其彼月不増不減。因^二須彌山^一現^レ有^二増減^一。如來應供等正覺亦復如^レ是。

…(中略)…其實如來不増不減、常如^二滿月^一。是故當^レ知^二如來常住^一。(東晋、法顯譯『大般涅槃經』卷第五、月喻品第十六)

○如^レ是衆生所^レ見不^レ同、或見^二半月^一、或見^二滿月^一、或見^二月蝕^一。而此月性實無^二増減侵蝕之者^一、常是滿月。如來之身亦復如^レ是。是故名爲^二常住不變^一。(36)

(南朝宋、慧嚴等『大般涅槃經』卷第九、月喻品第十五)と月は外見に満ち欠けはあるが、月そのものは不増不減であり、如來・應供・等正覺もそれと同じとし、殊に如來を満月に譬え、その完全な姿を記している。(37) 如來とは仏であり、人々を導く救済者という偉人で「常住不變」である。「常住」とは「無常」に対する言葉で永遠を意味しよう。

「日並皇子挽歌」に用いられる「望月乃」という譬喩的枕詞は文字表現を仏典から取り入れ、天子賞讃に仏の完全・偉大・永遠の意を加味して日並皇子を譬え、皇子の完全無欠な姿を包含させて「満波之」を導くのではないか。導かれる「満波之」の「満」の文字表現は、仏典の後秦龜茲國、鳩摩羅什譯『大智度論』の中では「永続的な時間軸

の中で欠けることなく満ち足りる」の意で用いられ、完全・偉大で永遠なる日並皇子が統治なされたならば、永続的に満ち足りた統治をなされたであろうと皇子を賞讃するのではないか。そのように表現することにより、翻って実際は統治をなさらずに薨去された日並皇子への深い悲しみと慰撫の心も強く表されている。

人麻呂が仏教思想そのものを描くことを目的とするとは考ええないが、仏典などに倣った文字表現は人麻呂歌の中に見える。例えば、

明日香皇女木廬殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌
：夏草乃 念之萎而 夕星之 彼往此去 大船 猶預不定見者
遣悶流 情毛不在… (卷二一一九六)

の「猶預不定」の文字表現は、

枯樹心與^レ疑俱猶預不定名與^二獼猴^一一行住坐臥。心在^二惡中^一名沒^二泥水^一。(隋、慧遠『涅槃義記』卷第六)

等、仏典にあり、仏典類出の四字熟語である。また、

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌(第二首)
：世間乎 背之不得者 蜻火之 燎流荒野尔 白妙之 天領巾
隠 鳥自物 朝立伊麻之豆 入日成 隠去之鹿齒… (卷二一一二一〇)

の「世間」も「深歎世間無常之苦」(東晋、法顯譯『大般涅槃經』卷下)、「世間虚空 衆生福盡」(南朝宋、慧嚴等『大般涅槃經』卷第一、序品第一)等あり、仏教より発生した文字表現である。人麻呂歌の「世間乎 背之不得者」(世間の道理には背けない)と詠む「世間の道理」とは人の世の無常をいうのであり、この表現は仏教の無常観が社会に

浸透していたことを知らずものともなっている⁽¹⁾。仏典が漢籍資料の一つとしてあり、人麻呂歌がそれを撰取することは間違ひなく言えよう⁽²⁾。

このように、人麻呂は鮑照の「中興歌」より天子賞讃の意の包含を引用して譬喩的枕詞を創造し、天子を日並皇子に置き換え日並皇子の仮の為政を賞讃しつつ、満月には文字表現に仏典にある「望月」を用いて、さらにその意を広げた。その譬喩的枕詞は完全であり偉大であり永遠である日並皇子を包含して「満波之^{たはし}」を導き、そのような皇子ならば永続的に完全無欠な統治をなされたと日並皇子を賞讃する。翻って統治をなさらず薨去された皇子への深い悲しみと慰撫の心をも伝達される。

四 おわりに

以上、「日並皇子挽歌」の中にある人麻呂歌初出の譬喩的枕詞である「春花之」と「望月乃」とを中心に考察してきた。人麻呂は多くの枕詞を創出し、その方法の一つとして漢籍や仏典等より文字表現を抽出し、それらに用いられる意を借用して、己の創出する枕詞にもその意を包含させて用いたと想定される。「春花之」と「望月乃」とはそのような方法によって生まれた枕詞であった。

「春花之」について言えば、南朝宋、鮑照の「中興歌」で「春花」は「春花滋」とあり、それは若き天子の才華の譬えで、天子を賞讃するものである。「日並皇子挽歌」では、その天子賞讃を日並皇子賞讃に置き換えその意を包含させて「春花之」という枕詞が創造された。「望月乃」

も「中興歌」に「三五容色満」とあって、その表現は天子賞讃を包含するのであり、「日並皇子挽歌」は天子を皇子に置き換えその意も取り込んでいよう。

しかし、「日並皇子挽歌」は「中興歌」の「三五(月)」ではなく「望月」という文字表現を用いる。「望月」を満月とする文字表現は仏典にあり、仏典では如来等、人々を救済する偉人を満月に譬える。如来は常住不変であり、仏典よりその文字表現を受容することにより、包含される日並皇子には完全・偉大・永遠の意が加わり、賞讃はさらに高くなる。完全・偉大・永遠なる日並皇子を包含する「望月乃」は「満波之^{たはし}」を導き、そのような日並皇子ならば永続的に完全無欠な統治をなされたと日並皇子は賞讃され、翻って統治をなさらずに薨去された皇子への深い悲しみと慰撫の心をも知られよう。

今後は、人麻呂の創出した枕詞について、「日並皇子挽歌」における「春花之」と「望月乃」以外の譬喩的枕詞である「天水」等にも言及し、またその他の人麻呂創出の枕詞についても検証して、人麻呂と漢籍や仏典との関わりをさらに追究したい。また、その後の『萬葉集』において、人麻呂創出の枕詞がどのように継承されていたのか等も探究していきたい。

【注】

(1) 以下、本稿における『萬葉集』の引用は、訓読は『万葉集(一)』(五)に、原文は『原文万葉集(上)』(下)に、(共に、佐竹昭広氏、山田英雄氏、工藤力男氏、大谷雅夫氏、山崎福之氏校注、二〇一三年

一月～二〇一五年三月、二〇一五年九月、二〇一六年二月、岩波書店)による。但し、一部、私的に改めたところがある。

(2) 伊藤博氏「人麻呂の表現と史実」(『萬葉集の歌人と作品 上』第五章第二節、一九七五年四月、塙書房)、参照。日並皇子は『日本書紀』に「夏四月癸未朔：(中略)：乙未、皇太子草壁皇子尊薨」(卷第三十、持統天皇、三年四月)と記され、皇太子ながら即位せず薨去された。同じく『日本書紀』に「天命開別天皇元年、生草壁皇子尊於大津宮」(卷第三十、持統天皇、称制前紀)とあり、薨去時は二十八歳の若さであった(本稿における『日本書紀』の引用は、小島憲之氏、直木孝次郎氏、西宮一民氏、藏中進氏、毛利正守氏校注・『日本書紀』③、新編日本古典文学全集4、一九九八年六月、小学館による)。

(3) 添付資料【人麻呂歌の枕詞】、参照。添付資料では、記紀歌謡(伝統的枕詞とする)と『萬葉集』巻一から巻四の枕詞を対象とし、それらの枕詞を、人麻呂歌初出の枕詞の確認と継承の実態を知ることを目的として、抽出した。(参考資料一)は記紀歌謡の枕詞、(参考資料二)は『萬葉集』にある人麻呂以前の枕詞、(参考資料三)は人麻呂歌の枕詞で、1、伝統的な枕詞、2、伝統に工夫を凝らした枕詞、3、人麻呂歌初出の枕詞に分類している。例えば、田部忌寸櫛子の歌に「敷^敷細乃^{細乃} 黒髮^{黒髮}」(巻四一四九三)とあり、田部忌寸櫛子は伝未詳であるが、四九三番歌が天智天皇の大殯の時に歌を詠んだ舍人吉年との贈答歌である為、人麻呂以前と考え、人麻呂の「しきたへの」(巻二一三三五、一三八、一九五、一九六、二二七、二二〇、二二二)を2の枕詞とした。(参考資料四)は『萬葉集』にある人麻呂同時代の枕詞、(参考

資料五)は人麻呂歌を初出とする枕詞を人麻呂創出と捉え、その枕詞の継承を表にし、最後に主たる歌人(笠金村、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、大伴坂上郎女、田辺福麻呂、高橋虫麻呂、大伴家持)の継承用例数を掲載したものである。人麻呂の経歴等は、注(5)、参照。

(4) 土橋寛氏「枕詞の源流」(『古代歌謡論』第十章、一九六〇年十一月、三一書房)。尚、枕詞という呼称自体は後のもので、土橋寛氏は「まくらことば」という語のもっとも古い呼称例は、顕昭の『古今集序注』とされる(「枕詞の概念と種類」、前掲書、第九章)。

(5) 柿本人麻呂の活動は『萬葉集』に収載された歌々によってのみ知ることができる。その中で確実に人麻呂作と言えるのは「人麻呂作歌」と記されるもので(本稿ではこれらを入麻呂歌と呼ぶ)、「人麻呂作歌」の中で、年次推定のできる最初が、持統三(六八九)年四月薨去の日並皇子尊の殯宮時の歌(巻二一六七～一六九、当該歌)で、最後が文武四(七〇〇)年四月薨去の明日香皇女の殯宮時の歌(巻二一九六～一九八)である。従って、人麻呂は、持統、文武朝に活躍した歌人と推定され、それは萬葉第二期にあたる(『萬葉集』の時代区分は、澤瀉久孝氏、森本治吉氏著『作者類別年代順萬葉集』、一九三二年五月、新潮社による)。但し、巻十の二〇三三番歌の左注に「此歌一首庚辰年作之、右、柿本朝臣人麻呂之歌集出」とある庚辰年を天武九(六八〇)年(糸川定一氏「人磨歌集庚辰年考」、『国語国文』三五卷十号、一九六六年十月)、この歌を入麻呂の自作と見れば、人麻呂は天武朝に頭角を現した歌人となる。人麻呂歌集は萬葉集編纂の原資料の一つとされるが、人麻呂との関係は十分には明らかではない(小

島憲之氏、木下正俊氏、東野治之氏校注・訳『萬葉集』②、新編日本古典文学全集7、一九九五年四月、小学館、一八五頁頭注、二四四頁頭注)。しかし、人麻呂歌集歌の中で作者名のない歌を人麻呂の自作とする考え方が一般的で、首肯される。

(6) 澤瀉久孝氏「枕詞を通して見たる人麻呂の獨創性」(『萬葉の作品と時代』、一九四一年三月、岩波書店)

(7) 小島憲之氏「上代びとの歌」(『古今集以前』第一章一三、一九七六年二月、塙書房)

(8) 身崎壽氏「人麻呂の場合―枕詞との新しい出会い―」(『日本文学』第二十九号、一九八〇年九月、日本文学協会)

(9) 添付資料【人麻呂歌の枕詞】、参照。

(10) 小島憲之氏「萬葉集と中国文学との交流」、「萬葉集の文字表現」

(『上代日本文学与中国文学 中』第五篇第五章、第四章、一九六四年三月、塙書房)

(11) 小島憲之氏「上代に於ける詩歌の表現」(『国風暗黒時代の文学 上』第二章一三、一九六八年十一月、塙書房)

(12) 前野直彬氏「春草考」(『春草考』、一九九四年二月、秋山書店、初出、『中国文学研究』第二号、一九六一年十二月)、参照。小島憲之氏も漢籍の悲哀の意のない「春草」の存在を述べられる(前掲、「上代に於ける詩歌の表現」)。

(13) 以下、本稿における『文選』の引用は、梁、昭明太子撰、唐、李善注『文選 附考異』(一九九八年十二月、藝文印書館)による。また、訓読等については、小尾郊一氏、花房英樹氏著『文選 一七』(全

釈漢文大系26(32)、一九七四年六月―一九七六年十月、集英社)を参照した。

(14) 「朝霜之」について、まず、日本書紀歌謡二四に「阿佐志毛能」という枕詞があるが(歌番号は武田祐吉氏『記紀歌謡集全講』、

一九五六年五月、明治書院による)、武田祐吉氏は、これは「朝の霜」ではなく「朝のもの」の意で枕詞としてミケ(御食)に冠すると述べられる(武田祐吉氏、前掲書)。また、『萬葉集』に「朝霜之消者々々」(巻十一―二四五八)とある歌は作者名を記さない人麻呂歌集

歌で、「朝霜之消」という表現自体を人麻呂の創造と捉えられる。さらに、魏の曹植詩の「人命若朝霜」は、白井伊都子氏が「朝霜

消安命」(巻七―一三七五)の典拠に挙げられる(「家持における

枕詞の方法」、『萬葉』第一五三号、一九九五年三月)。この一三七五番歌は人麻呂歌集歌より後に配列される作者未詳歌で、同作者の一三七四番歌の前に「春日山」を詠む一三七三番歌がある為、平城京遷都後の歌かと推測される。人麻呂作歌や人麻呂歌集歌には平城京遷

都後の歌と見るべき確例がなく(前掲書、『萬葉集』②、二四四頁頭注)、故に、一三七五番歌より人麻呂歌の方が古いと想定される。これらよ

り、「朝霜之」は漢籍より引用された人麻呂歌初出の枕詞と言えよう。

(15) 前掲、白井論文「家持における枕詞の方法」

(16) 拙稿「萬葉集」柿本人麻呂「近江荒都歌」における漢籍の受容―「春草」表現による荒都歌の一側面―(『和漢語文研究』第十九号、二〇二一年十一月)

(17) 「日並皇子挽歌」以外の「はるはなの」の用例の十例中、八例が

家持歌であることは、家持の人麻呂歌継承の可能性を示唆する。しかし、家持の「はるはなの」は実景が多く、また「秋の葉」と対照させて詠むものがあり（巻十七―三九八五、巻十九―四一八七、巻十九―四二二一）、そのように「春花」と「秋葉」とを対照させる方法は『藝文類聚』（巻第四十二、梁、庾成師「遠期篇」、梁、元帝「蕩婦秋思賦」等の漢籍に見られる為、それらより直接受容したとも考慮される。だが、人麻呂創出の枕詞の継承用例数の約半数が家持歌であり（添付資料【人麻呂歌の枕詞】（参考資料五）人麻呂創出の枕詞の継承、参照）、これは『萬葉集』における家持歌の掲載総数の多さを加味してもやはり多く、家持は人麻呂歌を継承しつつ独自の工夫も行ったと言えるのではないか。

(18) 以下、本稿における『玉臺新詠』の引用は、陳、徐陵編、清、呉兆宜注、清、程琰刪補、穆克宏氏點校『玉臺新詠箋注』（中國古典文學基本叢書、一九八五年六月、中華書局）による。

(19) 以下、本稿における鮑照詩の引用は、鮑照撰、謝朓撰、蕭統撰、江淹撰『鮑氏集 謝宣城詩集 梁昭明太子文集 江文通文集』（四部叢刊初編集部、一九六五年、台灣商務印書館）による。

(20) 以下、本稿における『藝文類聚』の引用は、唐、歐陽詢撰『宋本藝文類聚』（二〇一三年十二月、上海古籍出版社）による。

(21) これらは作者の実体験ではなく、例えば、第一詩では班婕妤に成り代わってその怨みを述べている（鈴木虎雄氏訳解『玉台新詠集中』、一九五五年四月、岩波書店、一六五頁解題、参照）。当時はそのような詩風が流行したのであろう（蕭綱を中心とする宮体詩など）。

(22) 以下、本稿における陶淵明詩の引用は、陶淵明著、逯欽立氏校注『陶淵明集』（中國古典文學基本叢書、一九七九年五月、中華書局）による。

(23) 白井伊津子氏は、この曹植詩の「春花」などを挙げて、「春花（春華）」が単なる花の盛りの意ではなく、容色の盛んなさまの譬喩として用いられ、人麻呂の場合、その詩文の譬喩的な表現を撰取するなど、歌の表現にとって、もつとも効果的な譬喩表現を求めたと述べられ（「修辭としての枕詞―柿本人麻呂の方法―」、『萬葉』第一六七号、一九九八年十一月）、首肯される。さらに、それをもう一步進めたい。(24) この詩は序に「余於長沙公_二為_レ族_一：（中略）：經_二過潯陽_一、臨_レ別贈_レ此。」とあり、同族である長沙公が潯陽を通過するので別れにあたり贈った詩と理解される。

(25) 『陶淵明集』、前掲書、二〇頁注（一三）に「春花、春華。喻長沙公少年富_二於才華_一」とある。

(26) 訓読については、鈴木敏雄氏著『鮑參軍詩集』（二〇〇一年二月、白帝社）を参照した。

(27) 『莊子』外篇「秋水」第十七に「秋水時至、百川灌_レ河」とある（本稿における『莊子』の引用は、王叔岷氏撰『莊子校詮 下』、二〇〇七年六月、中華書局による）。また、魏の李康「運命論」に「夫黄河清而聖人生、里社鳴而聖人出_レ」（『文選』卷第五十三）とあり、その李善注に「易乾鑿度曰、聖人受_レ命、瑞應先見_二於河_一、河水先清_レ」と記される。『宋書』には「孝武帝孝建三年九月、濟、河清、冀州刺史垣護之以聞。孝武帝大明五年九月庚戌、河、濟俱清、平原太守

申纂以聞。」(卷二十九、志第十九 符瑞下)と、孝武帝の時代に二度、河が清く澄んだとある(本稿における漢籍史書の引用は、二十四史、一九九七年十一月、中華書局による)。

(28) 上田武氏は、鮑照が陶淵明詩に学んでそれを積極的に受容したと述べられる(「鮑照とその時代の陶淵明の受容」、『六朝学術学會報』第三号、二〇〇二年三月)。

(29) 中森健二氏「鮑照の文学」(『立命館文学』第三四、三三五、三五六号、一九七五年十二月)

(30) 『宋書』には「世祖孝武皇帝諱駿……文帝第三子也。元嘉七年秋八月庚午生。……(中略)……三十年……四月……戊辰、上至于新亭。己巳、即皇帝位……」(卷六、本紀第六、孝武帝)とある。

(31) 前掲、小島論文「上代びとの歌」

(32) 以下、本稿における『説文解字』の引用は、後漢、許慎撰、清、段玉裁注『説文解字注』(一九八一年十月、上海古籍出版社)による。

(33) 当時、鮑照詩が日本に伝来していたか、前掲、小島論文「上代びとの歌」は、この「中興歌」の「春花」の用例を挙げつつ、確実に日本に伝来していたかどうかの言及を避けられ、芳賀紀雄氏は、鮑照の集は伝来していたと思われるものの、推測の域は出ないとされる(『萬葉集と中國文学』、『萬葉集における中國文学の受容』、二〇〇三年十月、塙書房)。上代当時の資料が殆ど現存しない為、このように言わざるを得ない。だが、両氏も述べられるように、漢籍にある表現と歌にある表現との一致や類似という内部情報がこれらの伝来を示唆するであろう。

(34) 以下、本稿における『釋名』の引用は、後漢、劉熙撰『釋名』(叢書集成初編、一九八五年、中華書局)による。

(35) 以下、本稿における仏典の引用は、高楠順次郎氏編『大正新修大藏經』(一九二四年四月〜一九三四年九月、大正一切經刊行會)による。

(36) 同文が、北涼、曇無讖譯『大般涅槃經』(卷第九、如來性品第四之六)にもある。

(37) 白井伊都子氏も、仏典に仏の面貌や威儀・人格の完全であることを満月に譬えた例が多くあり、月の欠けたところのない完全さを人事に及ぼすという表現に学んで「望月」を満ち足りた状態の譬喩に用いたとされる(前掲、白井論文「修辭としての枕詞」柿本人麻呂の「法」)。

(38) 後秦龜茲國、鳩摩羅什譯『摩訶般若波羅蜜經』(卷第十四)に「佛得如實相性」故、名爲「如來」(問相品第四十九)とある。

(39) 拙稿「萬葉集」柿本人麻呂歌における漢籍の受容―石中死人歌「天地 日月與共 滿將行」について―(『和漢語文研究』第十六号、二〇一八年十一月)

(40) 佐竹昭広氏「会に合はぬ花」(『佐竹昭広集』第一卷、二〇〇九年六月、岩波書店、初出、『万葉集六』月報、完訳日本の古典第七卷、一九八七年九月、小学館)。尚、佐竹氏は、

此魔波旬 今雖發善提心 猶墮不定 如少疊蟲

等、「猶墮不定」の用例を挙げられる。「預」は「豫」の通用字であり、

一九六番歌の「預」について、『萬葉集』の写本である西本願寺本は、その左側に「豫」と記している（山崎福之氏「萬葉集の「猶豫」について―左注の訓みのために―」、『親和國文』第二十二号、一九八七年十二月）。

(41) 辰巳正明氏「総論―万葉集の中の漢籍と仏典―」（『万葉古代学 研究年報』第十六号、二〇一八年三月）、参照。

『萬葉集』において、月は、

悲_レ傷膳部王_一歌一首

世間者_{よのなかは} 空物跡_{むなしきのと} 将有登曾_{あらむとぞ} 此照月者_{こゝるつきは} 満闕為家流_{みちかけしける}

(卷三一四四二)

寄_レ物發_レ思

隱口乃_{こもりくの} 泊瀬之山丹_{はつせのやまに} 照月者_{てるつきは} 盈吳為焉_{みちかけせ} 人之常無_{ひとのつねなき}

(卷七一二二七〇)

とあり、仏教の無常觀を詠む対象でもあった。月の満ち欠けの典拠も、

水流不_レ常滿_一 火盛不_レ久然_一 日出須臾沒 月滿已復缺 尊榮

豪貴者 無常復過_レ是 念_レ當勤精進 頂_レ禮無上尊_一

(後漢、安世高譯『佛說罪業應報教化地獄經』)

と仏典にある（佐竹昭広氏「無常」について、『佐竹昭広集』第五卷、二〇一〇年二月、岩波書店、初出、「岩波講座日本文学と仏教」第四

卷無常、一九九四年十一月、岩波書店）。

(42) 石田茂作氏著「奈良朝現在一切経疎目録」（『写経より見たる奈良朝仏教の研究』付録、一九三〇年、東洋文庫）は、正倉院文書中の写経生の日記や写経目録の断簡等を拾集、整理したもので、そこには

『大般涅槃經』、『泥洹經』、『大智度論』、『涅槃經義記』、『摩訶般若波羅蜜經』、『大方等大集經』、『罪業應報教化地獄經』等の名が記され、上代におけるこれらの伝来が確認される。

*本稿では、引用文献等、一部、現行字体に改めたところがある。

(二〇二二年九月二十八日受理)
うちだ ふみ・京都府立大学大学院学術研究員)

添付資料【人麻呂歌の枕詞】（参考資料一） 記紀歌謡の枕詞（伝統的枕詞）

記紀歌謡の枕詞（伝統的枕詞）

古事記		日本書紀	
1彼久毛多都(みくたつ)伊豆毛(1)	31多迦比迦流(みくたつ)比能美古(29)	67迦敷彌肥能(みくたつ)毛由流(77)	1彼勾度多菟(みくたつ)伊弩毛(1)
2在怒部登理(みくたつ)岐敷斯(2)	35夜須美志志(みくたつ)和賀富常株美(29)	68阿志比紀能(みくたつ)夜麻(79)	2阿唐佐簡優(みくたつ)遊奈(3)
3彌波部登理(みくたつ)連那(2)	36阿良多麻能(みくたつ)登斯(29)	69加理計母能(みくたつ)美歌禰(81)	3依企都登利(みくたつ)阿皮(5)
4坂延入佐能(みくたつ)寶(3)	37阿良多麻能(みくたつ)都紀(29)	70阿麻陀布(みくたつ)加流(84)	4伊殊屋波菟(みくたつ)臣能羅(7)
5夜婆多麻能(みくたつ)用(4)	38多美母能(みくたつ)勝具理(32)	71阿麻陀布(みくたつ)加流(85)	5伽牟加壹能(みくたつ)伊弩(8)
6阿佐比能(みくたつ)惠美佐迦延(4)	39还本枝理能(みくたつ)阿布美(89)	72布那阿麻理(みくたつ)阿比理(87)	6彌那奈能(みくたつ)具能能同羅(9)
7多人豆登能(みくたつ)斯加夜流(4)	40知波夜比能(みくたつ)加豆怒(42)	73那久多佐能(みくたつ)阿比理(88)	7阿摩奈能(みくたつ)伊那差(12)
8阿和由岐能(みくたつ)斯加夜流(4)	41毛毛豆多布(みくたつ)都賀買(43)	74夜婆多豆能(みくたつ)牟加間(89)	8之摩途等利(みくたつ)宇(12)
9夜婆多麻能(みくたつ)入路夜(5)	42美本枝理能(みくたつ)連豆夜(43)	75計母理久能(みくたつ)波都世(90)	9彌那奈能(みくたつ)具能能同羅(11)
10弥波部登理(みくたつ)牟那美流(5)	43美都具理能(みくたつ)那連(43)	76都久由美能(みくたつ)許夜流(90)	10彌那奈能(みくたつ)具能能同羅(14)
11彌那美(みくたつ)寶(5)	44美都具理能(みくたつ)那連(44)	77阿豆由美(みくたつ)多多理(90)	11宇磨佐佐(みくたつ)彌和(16)
12弥波伊理能(みくたつ)阿遠夜(5)	45美豆多麻能(みくたつ)伊氣(45)	78許母理久能(みくたつ)波都世(91)	12宇磨佐佐(みくたつ)彌和(17)
13弥波部登理(みくたつ)牟那美流(5)	46知波夜比能(みくたつ)宇理(51)	79麻多麻那須(みくたつ)阿賀母布伊毛(91)	13彌句毛多菟(みくたつ)伊頭毛(20)
14幣部那美(みくたつ)曾(5)	47知波夜比能(みくたつ)宇理(52)	80阿賀美須須(みくたつ)阿賀母布部麻(91)	14多多彌許奈(みくたつ)弊愚利(23)
15弥波部登理(みくたつ)牟那美流(5)	48入瀨那夜能(みくたつ)摩佐豆古(93)	81多美許母(みくたつ)幣具理(92)	15阿佐志毛能(みくたつ)彌和(21)
16牟良登理能(みくたつ)牟禮(5)	49於豆流夜(みくたつ)那禰波(54)	82夜須美志志(みくたつ)和賀富常株美(98)	16多摩岐波(みくたつ)于池(28)
17比氣登理能(みくたつ)比氣(5)	50許母理豆能(みくたつ)多多用波理彌(57)	83彌多門能(みくたつ)藤云(98)	17多摩岐波(みくたつ)于知(29)
18和加久佐能(みくたつ)都麻(5)	51都美夜夜(みくたつ)夜麻志呂(58)	84蘇良美都(みくたつ)夜麻登(98)	18瑠布迦利能(みくたつ)小豆岐(29)
19和加久佐能(みくたつ)都麻(6)	52都美夜夜(みくたつ)夜麻志呂(59)	85夜須美志志(みくたつ)和賀富常株美(99)	19知摩能(みくたつ)伽豆怒(34)
20阿和由岐能(みくたつ)斯加夜流(6)	53阿良多余志(みくたつ)那良(59)	86夜本爾余志(みくたつ)伊岐豆岐(101)	20彌豆多摩菟(みくたつ)那那(35)
21多人豆登能(みくたつ)斯加夜流(6)	54夜毛牟加布(みくたつ)許許呂(61)	87阿理夜久能(みくたつ)美弊(101)	21彌波御骨(みくたつ)于池(42)
22意波部登理(みくたつ)加毛(9)	55都美夜夜(みくたつ)夜麻志呂(62)	88多加比加流(みくたつ)比能美古(101)	22智波御骨等(みくたつ)于池(43)
23伊須入波斯(みくたつ)入治良(10)	56都美夜夜(みくたつ)夜麻志呂(62)	89多加比加流(みくたつ)比能美古(102)	23彌那奈能(みくたつ)於瀨(44)
24美都美都斯(みくたつ)久米能古(11)	57泥土彌能(みくたつ)斯彌多陀牟岐(62)	90多加比加流(みくたつ)比能美古(102)	24彌那奈能(みくたつ)於瀨(44)
25美都美都斯(みくたつ)久米能古(11)	58都美夜夜(みくたつ)夜麻志呂(64)	91毛毛志紀能(みくたつ)於常美夜(103)	25彌那奈能(みくたつ)於瀨(45)
26美都美都斯(みくたつ)久米能古(12)	59多加比加流(みくたつ)波波夫佐(68)	92宇豆良登理(みくたつ)比礼(103)	26比禮區輸輪(みくたつ)伽之古俱(45)
27美都美都斯(みくたつ)久米能古(13)	60多加比加流(みくたつ)波波夫佐(69)	93彌波須受(みくたつ)宇受須麻理(103)	27於駱弓屢(みくたつ)那耳岐(48)
28加牟加是能(みくたつ)伊勢(14)	61多加比加流(みくたつ)久良波斯夜麻(70)	94多加比加流(みくたつ)比(103)	28菟菟泥赴(みくたつ)擲奈之呂(53)
29多多那米豆(みくたつ)伊那佐(15)	62多摩岐波流(みくたつ)宇知(72)	95美那曾會(みくたつ)於常美夜(104)	29毛毛多羅羅(みくたつ)擲奈之呂(54)
30志麻都登理(みくたつ)宇(15)	63多摩岐波流(みくたつ)宇知(72)	96須美須志(みくたつ)和賀富常株美(105)	30菟菟泥赴(みくたつ)擲奈之呂(54)
31夜婆那佐須(みくたつ)伊豆毛(24)	64蘇良美都(みくたつ)夜麻登(72)	97意布良余志(みくたつ)斯臣(111)	31阿耳耳像羅(みくたつ)體羅(54)
32夜庇佐斯(みくたつ)佐賀年(25)	65多加比加流(みくたつ)比能美古(73)	98毛毛豆多布(みくたつ)奴弓(112)	32鳥陀弓(みくたつ)夜莽(54)
33比佐迦多能(みくたつ)阿米(28)	66蘇良美都(みくたつ)夜麻登(73)	99比禮區輸輪(みくたつ)伽之古俱(45)	33菟菟泥赴(みくたつ)以破(56)

(注) 記紀歌謡の枕詞の認定は、武田祐吉氏『記紀歌謡集全編』(1954年5月、明治書院)による。
() 内の歌番号も上記による。

34菟菟泥赴(みくたつ)擲奈之呂(57)	70都奴波羅符(みくたつ)以麻例(97)	34菟菟泥赴(みくたつ)擲奈之呂(57)	71那須美夫々(みくたつ)夜我其間那美(97)
35菟菟泥赴(みくたつ)夜莽之呂(58)	72彌那奈能(みくたつ)阿麻(59)	35菟菟泥赴(みくたつ)夜莽之呂(58)	72彌那奈能(みくたつ)阿麻(59)
36比佐簡多能(みくたつ)阿麻(59)	73彌那奈能(みくたつ)阿麻(104)	36比佐簡多能(みくたつ)阿麻(59)	73彌那奈能(みくたつ)阿麻(104)
37波多多摩能(みくたつ)佐彌始和摩(61)			

(参考資料二) 『萬葉集』人麻呂以前

『萬葉集』人麻呂以前の枕詞

1鹿見津山跡	(巻-1)	20玉匣 將見圓山	(巻-94)
2彌崎 八間跡	(巻-2)	21玉匣 三室戸山	(巻-94或本)
3彌知之 我大王	(巻-3)	22水邊苺 信機	(巻-96)
4玉迎春 内	(巻-4)	23水邊苺 信機	(巻-97)
5村肝乃 心	(巻-5)	24梓弓 引	(巻-98)
6奴要子鳥 下歌	(巻-5)	25玉響 美	(巻-101)
7隼草次 懸	(巻-5)	26千響 故 神	(巻-101)
8隼草 吾大王	(巻-5)	27青鹿乃 木麻	(巻-148)
9草枕 客	(巻-5)	28玉鏡 影	(巻-149)
10冬木成 春	(巻-16)	29彌知之 吾期大王	(巻-152)
11味酒 三輪	(巻-17)	30鯉魚取 淡師乃海	(巻-153)
12青丹吉 奈良	(巻-17)	31若草乃 孺	(巻-153)
13萱草指 武良前	(巻-20)	32彌知之 和期大王	(巻-155)
14紫草能 尔保敏類	(巻-21)	33百穢城乃 大宮人	(巻-155)
15打麻乎 麻織王	(巻-22)	34草枕 客	(巻-145)
16空御之 命	(巻-24)	35那耶乃 黑髮	(巻-198)
17奴婆珠能 黑髮	(巻-28)		
18山多豆乃 迎	(巻-30)		
19玉匣 覆	(巻-33)		

『萬葉集』 柿本人麻呂「日並皇子挽歌」における漢籍の受容 — 「春花」と「望月乃」の文字表現を中心にして —

(参考資料三) 人麻呂歌の枕詞

人麻呂歌の枕詞

1、伝統的な枕詞		2、伝統に工夫を凝らした枕詞		3、人麻呂歌初出の枕詞	
1鹿見 倭	(巻1-29或云)	1玉手次 敵火	(巻1-29)	1藤木乃 弼羅爾	(巻1-29)
2清丹吉 平山	(巻1-29)	2百羅城之 大宮處	(巻1-29)	2天乃滿 倭	(巻1-29)
3清丹吉 平山	(巻1-29或云)	3安見知之 吾大王	(巻1-38)	3石走 淡海國	(巻1-29)
4天羅 夷	(巻1-29)	4夏草之 念思奈婁	(巻1-31)	4御心乎 吉野	(巻1-36)
5八幡知之 吾大王	(巻1-36)	5弓峰經 石見	(巻1-35)	5御食向 未禮	(巻1-36)
6石磯城乃 大宮人	(巻1-36)	6大舟之 渡乃山	(巻1-35)	6花散手 節	(巻1-41)
7八幡知之 吾大王	(巻1-45)	7燭燈有 屋上乃山	(巻1-35)	7高麗 日之皇子	(巻1-45)
8鹽口乃 泊瀬	(巻1-45)	8歌妙乃 衣	(巻1-35)	8坂島乃 朝越	(巻1-45)
9草枕 多日	(巻1-45)	9項魚取 海	(巻1-38)	9玉限夕 荒野	(巻1-45)
10麻魚取 海	(巻1-31)	10歌妙之 珠之手木	(巻1-38)	10真草折 荒野	(巻1-47)
11肝向 心	(巻1-35)	11夏草之 念思奈婁	(巻1-38)	11葉 過	(巻1-47)
12久堅之 天	(巻1-167)	12大船之 思應	(巻1-167)	12藤乃 置	(巻1-31)
13久堅乃 天	(巻1-168)	13刺竹之 皇子	(巻1-167-云)	13言佐久 辛乃崎	(巻1-35)
14島玉之 夜	(巻1-169)	14蒔刺 日	(巻1-169)	14深海松乃 深	(巻1-35)
15島玉乃 夜	(巻1-194)	15歌妙乃 袖	(巻1-193)	15延都多乃 別	(巻1-35)
16草枕 旅	(巻1-194)	16歌妙之 袖	(巻1-196)	16天傳 八日	(巻1-35)
17久堅能 天	(巻1-199)	17鏡成 見	(巻1-196)	17藤乃 置	(巻1-38)
18八幡知之 吾大王	(巻1-199)	18夏草乃 念之萋	(巻1-196)	18指上 日	(巻1-167-云)
19冬木成 春	(巻1-199)	19大船 猶預不定	(巻1-196)	19高照 日之皇子	(巻1-167)
20冬木成 春	(巻1-199-云)	20千賀破 人	(巻1-199)	20飛鳥之 淨之宮	(巻1-167)
21八幡知之 吾大王	(巻1-199)	21刺竹 皇子	(巻1-199-云)	21春花之 貴	(巻1-167)
22玉手次 懸	(巻1-199)	22白妙乃 麻衣	(巻1-199)	22望月乃 滿波之	(巻1-167)
23久堅之 天	(巻1-200)	23赤紙刺 日	(巻1-199)	23春水 仰而待	(巻1-167)
24麻魚取 海	(巻1-220)	24島玉能 簪	(巻1-199)	24飛鳥 明日香	(巻1-194)
25八幡知之 吾大王	(巻1-239)	25大船之 思應	(巻1-207)	25鏡刀 身身刺	(巻1-194)
26高光 吾日乃皇子	(巻1-239)	26梓弓 聲	(巻1-207)	26玉垂乃 越	(巻1-194)
27久堅乃 天	(巻1-239)	27玉手次 敵火	(巻1-207)		
28久堅乃 天	(巻1-240)	28白妙之 天領巾	(巻1-210)		
29天羅 夷	(巻1-255)	29白榜 天領巾	(巻1-213)		
30袖籠乃 乱	(巻1-256)	30梓弓 音	(巻1-217)		
31八幡知之 吾大王	(巻1-261)	31布榜乃 手枕	(巻1-217)		
32高麗 日之皇子	(巻1-261)	32若草 其織子	(巻1-217)		
33久乃 天	(巻1-261)	33歌妙乃 枕	(巻1-220)		
34草枕 鶴	(巻1-426)	34色妙乃 枕	(巻1-222)		
35鹽口能 泊瀬	(巻1-428)	35白榜乃 藤江	(巻1-252-本云)		

(注1) 枕詞の認定については、橋本達雄氏「万葉集枕詞一覧」(『万葉集事典』、1975年10月、有精堂)、廣岡義隆氏「資料 枕詞の研究のために『萬葉集』枕詞の一覧」(『三重大学日本語学』12巻、2001年6月)等を参照し、一部、私的に判断した。

(注2) 人麻呂歌の枕詞の、1の伝統的な枕詞とは、記紀歌謡に人麻呂以前の萬葉第一期の枕詞を加えたもの。

(注3) 2の伝統に工夫を凝らした枕詞とは、1に比して文字表現や被枕詞が違うなどの工夫が見られるもの。

(注4) 3の人麻呂初出の枕詞とは、1・2になく、同時代の枕詞と比しても人麻呂歌が先と想定されるもの。但し、同時代のもので共に作歌年代が分からず推定も難しい場合は、人麻呂歌初出とした。

(参考資料四) 人麻呂同時代

『萬葉集』人麻呂同時代の枕詞	
1白妙能 衣	(巻1-28)
2乙津物 國	(巻1-43)
3吾妹子乎 来見乃山	(巻1-44)
4八幡知之 吾大王	(巻1-50)
5高照 日乃皇子	(巻1-50)
6荒妙乃 藤原	(巻1-50)
7誓志 淡海乃國	(巻1-50)
8手能 田上山	(巻1-50)
9真木佐吉 楯	(巻1-50)
10物乃布能 八十氏河	(巻1-50)
11鴨自物 水乃澤	(巻1-50)
12玉藻成 浮宿	(巻1-50)
13百不足 五十	(巻1-50)
14八幡知之 和朗大王	(巻1-52)
15高照 日之皇子	(巻1-52)
16荒妙乃 藤井	(巻1-52)
17足日木乃 山	(巻1-107)
18足日木能 山	(巻1-108)
19大船之 津	(巻1-159)
20八幡知之 我大王	(巻1-162)
21八幡知之 吾大王	(巻1-162)
22高照 日之皇子	(巻1-162)
23神風乃 伊勢	(巻1-162)
24味羅 文乃寸	(巻1-162)
25高照 日之御子	(巻1-162)
26神風乃 伊勢	(巻1-163)
27高光 我日皇子	(巻1-171)
28高光 吾日皇子	(巻1-173)
29度多泉 流	(巻1-178)
30真木柱 太	(巻1-180)
31毛許呂婆達 春冬	(巻1-191)
32天羅 夷	(巻1-227)
33白榜 磐余池	(巻1-416)
34名邊竹乃 千緑	(巻1-420)
35鹽口乃 娘羅	(巻1-420)
36玉梓乃 人	(巻1-420)
37久堅乃 天	(巻1-420)
38弓峰經 石村	(巻1-423)
39延葛乃 弼羅水	(巻1-423)
40田葛根乃 弼羅長	(巻1-423-云)
41大舟之 念應	(巻1-423-云)

(参考資料五) 人麻呂創出の枕詞の継承

たまむぎ…11例	玉限夕 (巻1-15)	玉緒 碧垣淵 (巻2-207)	珠緒 勇藤 (巻2-210)	たまむぎの…37例	玉神 道 (巻2-207)	玉神 之道 (巻2-220)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…3例	玉限夕 (巻10-1816)	玉緒 昨夕 (巻11-2291)	玉限 石垣淵 (巻11-2209)	人麻呂歌…2例	玉神 路 (巻11-2270)	玉神 道 (巻11-2283)	
人麻呂歌集…3例	玉緒 勇藤 (巻8-1526)	玉緒 石垣淵 (巻11-2700)	玉限 日 (巻13-3250)	人麻呂歌集…4例	玉神 路 (巻11-2280)	玉神 道 (巻11-2280)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…3例	玉緒 直一日 (巻10-2311)	玉緒 勇藤 (巻12-3065)	玉限 日 (巻13-3250)	人麻呂歌以後…31例	玉神 道 (巻1-79)	玉神 之道 (巻11-2205)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
(内訳) 藤良…1例、未詳4例	(他に枕詞としない「つぎさち」の用例…9例)			(内訳) 笠倉村…2例	玉神 道 (巻1-534)	玉神 之道 (巻11-2283)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…2例	劔刀 於身訓 (巻2-104)	劔刀 身二訓 (巻2-217)		笠倉村…1例	玉神 之道 (巻1-534)	玉神 之道 (巻12-2201)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌集…2例	劔刀 名 (巻11-2189)	劔刀 身訓 (巻11-2037)	劔刀 磨 (巻13-3226)	安貴王…1例	玉神 之道 (巻5-586)	玉神 之道 (巻12-2201)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…2例	劔刀 身亦取 (巻1-604)	劔刀 身訓 (巻11-2037)	劔刀 磨 (巻13-3226)	山上禮良…1例	玉神 之道 (巻5-586)	玉神 之道 (巻12-2201)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…2例	劔刀 名 (巻1-616)	劔刀 名 (巻12-2284)	都流波多知 身 (巻14-3185)	諸王諸臣子等…1例	玉神 道 (巻6-948)	玉神 之道 (巻12-2201)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
(内訳) 笠倉女、山口女三、虫麻呂、笠持…各1例、未5	劔刀 已 (巻9-1741)	劔刀 磨 (巻13-3227)	都流波多知 刀具 (巻20-4167)	石川老夫…1例	玉神 道 (巻6-948)	玉神 之道 (巻12-2201)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
どみかた…9例				高橋出麻呂…1例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…1例	鶴之鳴 吾妻 (巻2-199)			田辺福麻呂…1例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…6例	鶴之鳴 東 (巻3-382)	鶴鳴 東 (巻12-3194)	登利我奈久 安豆麻 (巻20-4181)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
圃人、福麻呂、虫麻呂、池主…各1例、笠持…3例、未1	鶴鳴 東 (巻9-1800)	鶴鳴 東 (巻18-4004)	登里我奈久 安豆麻 (巻20-4181)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
…各1例、笠持…3例、未1	鶴鳴 吾妻 (巻9-1807)	鶴鳴 東 (巻18-4004)	登里我奈久 安豆麻 (巻20-4181)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
つねしもの…3例	(他に枕詞としない「つねしもの」の用例…3例)			大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…1例	露箱乃 置 (巻2-1811)	露箱乃 置 (巻2-188)	露箱之 消 (巻2-199)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…6例	露箱乃 置 (巻3-413)	露箱乃 置 (巻3-413)	露箱乃 安伎 (巻17-4011)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
三石、福麻呂、各風、笠持…各1例、未1	露箱乃 消 (巻3-466)	露箱乃 消 (巻12-3043)	露箱之 過 (巻19-4211)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
あさきりの…5例	(他に枕詞としない「あさきり」の用例…2例)			大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…1例	朝霧 往来 (巻2-106-云)	日暮 八重山 (巻10-1941)	安佐理理能 美太流 (巻17-4008)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…7例	朝霧 妻藤 (巻3-481)	日暮 八重山 (巻10-1941)	安佐理理能 美太流 (巻17-4008)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
笠倉女、高橋朝臣、陽春…各1例、未3	朝霧 豊 (巻1-509)	日暮 八重山 (巻10-1941)	安佐理理能 美太流 (巻17-4008)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
もみちらの…8例	(他に枕詞としない「もみちら」の用例…11例)			大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…2例	葉 過 (巻1-47)	黄葉乃 過 (巻2-207)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌集…1例	黄葉乃 移 (巻3-459)	黄葉之 過 (巻10-2297)	黄葉之 過 (巻13-3314)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…3例	黄葉乃 過 (巻4-623)	黄葉之 散過 (巻13-3333)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
黒大養人上…1例、未4				大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
いやはしる…7例	石走 淡海國 (巻1-29)	人麻呂歌集…1例	石走 淡海國 (巻7-1287)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…5例	石走 淡海乃國 (巻1-50)	石渡 垂見 (巻8-1418)	伊波渡之流 多伎 (巻15-3617)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…3例	志貴皇太子、大藤麻呂…各1例、和3	石走 垂水 (巻12-3025)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
たかてらす…7例				大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…2例	高照 日之皇子 (巻1-45)	高照 日之皇子 (巻2-167)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
古歌集…2例、持統天皇…2例	高照 日之御子 (巻2-162)	高照 日之皇子 (巻2-162)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…3例、未3	高照 日乃皇子 (巻1-50)	高照 日之皇子 (巻1-52)	高照 日之皇子 (巻13-3234)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
あさむし…4例				大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌…1例	朝毛吉 木上 (巻2-199)	朝毛吉 木上 (巻2-199)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
人麻呂歌以後…3例	朝毛吉 木人 (巻1-55)	朝毛吉 木山 (巻7-1290)	朝雲吉 城於道 (巻13-321)	大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)
藤原藤原、笠倉村…各1例、未3	麻袋吉 木道 (巻4-548)	朝雲吉 木 (巻9-1680)		大伴家持…11例	玉神 道 (巻8-1534)	玉神 之道 (巻13-3318)	多麻保三能 美知 (巻7-3802)

(参考資料五) 続き

あさひの…1例	朝鳥 往来 (巻2-196)		とどろの…3例	(他に枕詞とないでとどろの用例…2例)	飛鳥 浄之宮 (巻2-167)	飛鳥 明日香 (巻2-194)	飛鳥 明日香 (巻2-196)
人麻呂歌…1例	朝鳥之 啼耳哭 (巻3-481)	朝鳥之 啼耳鳴 (巻3-483)	人麻呂歌…3例	人麻呂歌以後…2例 元例(7)未1	飛鳥 明日香 (巻1-78)	飛鳥 飛鳥 (巻16-3791)	
あさひの…1例	朝霜之 消 (巻2-190-1云)	人麻呂歌集歌…1例	はるばるの…5例	(他に枕詞とないはるばるの用例…6例)	春花之 貫 (巻2-167)	春花能 佐可里 (巻18-4106)	春花乃 尔大要盛 (巻19-4211)
人麻呂歌…1例	朝霜之 消 (巻7-1975)	朝霜乃 消 (巻12-3055)	人麻呂歌…1例	人麻呂歌以後…4例	春花乃 逢春風 (巻10-1886)		
人麻呂歌以後…2例 未詳2	(他に枕詞とない「おきつもの」用例…1例)		福麻呂、1例、家持、2例、未1	福麻呂、1例、家持、2例、未1			
おきつもの…4例	奥津藻之 名延 (巻2-207)	奥藻之 名延 (巻11-2782)	たまごの…5例	玉垂乃 越 (巻2-194)	玉垂乃 越 (巻2-195)		
人麻呂歌…1例	奥津藻之 名延 (巻1-43)	奥藻之 名延 (巻11-2782)	人麻呂歌…2例	玉垂 小簾 (巻11-2364)	玉垂 小簾 (巻11-2364)		
人麻呂歌以後…3例	巳津物 隠 (巻4-511)		古歌集…1例 未詳1例	玉垂之 小簾 (巻7-1073)	玉垂之 小簾 (巻11-2556)		
当麻呂歌、2例、未詳1	巳津物 隠 (巻4-511)		人麻呂歌以後…2例 未2	あちさの…5例			
あちさや…4例	(他に枕詞とない「あちさや」の用例…3例)		あちさの…5例	人麻呂歌…1例	味澤相 目 (巻2-196)	味澤相 目 (巻11-2555)	味澤相 目 (巻12-2934)
人麻呂歌…1例	天飛也 帷 (巻2-207)	天飛也 帷 (巻11-2956)	人麻呂歌以後…4例	人麻呂歌以後…4例	味澤相 目 (巻6-942)	味澤相 目 (巻6-942)	
人麻呂歌以後…3例	天翔哉 帷 (巻4-543)	天飛也 帷 (巻11-2956)	人麻呂歌…1例	人麻呂歌以後…1例	赤人、福麻呂、各1例、未2	赤人、福麻呂、各1例、未2	
金村、健良、未詳、各1例			ぬえどの…5例	宿見鳥之 片隠 (巻2-196)			
まぶす…4例	梶付 燧屋 (巻2-210)	梶付 燧屋 (巻2-213)	人麻呂歌…1例	奴延鳥乃 能存与比 (巻5-892)	奴延鳥 浦嘆 (巻10-2031)	奴延鳥能 守良奈氣 (巻17-3078)	
人麻呂歌…2例	摩久良豆久 都摩夜 (巻5-795)	杜附 都麻屋 (巻9-4154)	人麻呂歌以後…4例	奴延鳥之 真歌 (巻10-1997)	(他に枕詞とない「あたら」の用例…2例)		
はるばるの…3例	春鳥之 佐麻欽比 (巻2-199)	春鳥乃 佐麻欽比 (巻20-4408)	あたらへの…5例	荒袴 藤江 (巻3-252)			
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		人麻呂歌…1例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…2例 福麻呂1、家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
つみのきの…3例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…2例 赤人1、家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
いひのなす…3例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…2例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
たぐはの…3例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…2例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
あまつみつ…2例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
ゆふつづの…2例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 家持1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 未1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
はるささの…2例 (他に枕詞とない用例…1例)	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌…1例	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	
人麻呂歌以後…1例 未詳1	春鳥能 啼耳鳴 (巻9-1804)		あたらへの…5例	荒妙乃 藤原 (巻1-50)	荒妙 藤井 (巻6-398)	安良多倍乃 (巻15-3607) 栗伝	

人麻呂歌にのみ見える枕詞…21例 (他に枕詞とない用例、「あきやまの」…10例、「ともしひの」…2例、「はなぢらふ」…1例)									
そらにみつ…1例	ひろづ…1例	さしあがる…1例	あきやまの…1例	たまもじ…1例	やまのまか…1例	こときへ…2例			
天来端 倭 (巻1-29)	御著 手箱 (巻1-41)	指上 日 (巻2-167-云)	秋山 下部留 (巻2-217)	玉藻吉 讃岐 (巻2-220)	山際從 出雲 (巻3-129)	言佐兼久 辛乃崎 (巻2-155)	言左兼久 百濟 (巻2-189)		
みこころを…1例	さかどりの…1例	おほゆきの…1例	なよたけの…1例	わかごまを…1例	やぐもす…1例	おほまじの…2例			
御心乎 吉野 (巻1-36)	坂鳥乃 朝越 (巻1-45)	大雪乃 乱 (巻2-199)	奈用竹乃 藤遠依 (巻2-217)	弱藤乎 筑路 (巻3-239)	八雲側 出雲 (巻3-130)	大鳥乃 羽易乃山 (巻2-210)	大鳥 羽易山 (巻2-213)		
はなぢらふ…1例	まさはる…1例	ゆさはなの…1例	そかぞふ…1例	ともしひの…1例	たまきぬの…1例	ふすまぢを…2例			
花散相 秋津 (巻1-36)	真草須 荒野 (巻1-47)	木蘭花乃 秦 (巻2-199)	天敷 凡津 (巻2-219)	留火之 明 (巻3-254)	珠衣乃 筑紫左調 (巻4-503)	奈道乎 引手乃山 (巻2-212)	奈路 引出山 (巻2-215)		

主たる歌人(金村、赤人、徳良、旅人、坂上郎女、福麻呂、虫麻呂、家持)の人麻呂歌創出の枕詞の継承用例数										
歌人名	枕詞	たまほの	まさかかみ	ものよの	たまづきの	たまきる	つるきたち	とりかなく	つゆしもの	あさよし
金村		2例		2例						1例
山部赤人							1例			
大伴旅人								1例		
山上徳良		1例								
大伴坂上郎女					3例					
田辺福麻呂		1例			1例					
高橋虫麻呂		1例			2例					
大伴家持		11例	4例	8例	1例	1例	1例	3例	3例	1例
小計		16例	9例	11例	2例	1例	2例	3例	4例	1例
歌人名	枕詞	はるはなの	あぢさほ	ぬえどりの	あれたへの	はふつたの	ふかみるの	もちづきの	みけむかふ	あさどりの
金村										1例
山部赤人			1例		1例		1例			
大伴旅人										
山上徳良				1例						
大伴坂上郎女										
田辺福麻呂		1例								
高橋虫麻呂										
大伴家持		2例		1例						
小計		3例	2例	2例	1例	2例	1例	1例	2例	1例
歌人名	枕詞	あまどぶや	まらづく	はるとりの	つかのきの	いひひなす	たぐはなの	あまつみづ	ゆふつづの	合計
金村		1例								7例
山部赤人					1例					5例
大伴旅人										0例
山上徳良			1例							7例
大伴坂上郎女										5例
田辺福麻呂										11例
高橋虫麻呂										4例
大伴家持		1例		1例	1例	1例	1例	1例	1例	39例
小計		2例	2例	2例	2例	1例	1例	1例	1例	78例